

2023 仙台集会 あそび分科会 分散会別提案要旨

A 分散会（ハイブリッド開催）*仙台会場「対面」+zoom「オンライン」

北海道・仙台・信州・盛岡

【北海道】佐々木 七海 「みんなでバツタミーつけた!」モエレはとぼっぼ保育園

1歳児から持ち上がりの2歳児17名の子どもたちの実践です。生活の中で子どもたちの要求や思い願いをどのように実現するかを、保育者が子どもの心に寄り添いながら子どもたちの育ちを認め、温かく見守っている姿があります。自然との関わりであるバツタへの興味をペットボトルで作った「いいものバック」というアイテムを個人持ちにしたことで「バツタを捕まえたい」という子どもたちの気持ちを高め、子どもたち各々の興味や関心を押さえながらゆったりとした移り変わる季節の中で、時には叙情的に子どもたちの生活が描かれています。自然との関わりの中で子どもたちが発見し思考する姿の中から、子どもたちの成長を的確に捉えている「はとぼっぼ保育園」の保育者たちの眼差しがあり、今後の私たちの保育観や子ども観の一助になるような実践です。

【仙台】宮川 桃華 「遊びの中で育まれる主体性とは」認定こども園やかまし村

3歳児こうめ組31名、担任3名。担任は子どもたちが園生活で安心してあそぶ姿がある一方で初めての事などに「やらない」と話す子が多く、苦手な場面を避ける子どもたちの中に「本当はやってみたい」という気持ちがあるのではないかと考えます。その中でも特に不安の大きかったKの姿を中心に捉え、クラスの中で忍者ごっこが盛り上がります。それをきっかけに友だちの中でも安心して過ごし、Kの変化していく姿を丁寧にとらえている様子と子どもを支える保育者の関わりについても書かれています。子どもたちがあそびの中で心が動かされ、「あそびの中で育まれる主体性」とはどういうことかなど、考えられる実践です。

【信州】比楽広太「もういいよ。から始まるかくれんぼごっこ」認定こども園ちろばの杜

日々、森や川、田んぼ、農園といった様々な自然のフィールドに出かけ、過ごしているちろばの子どもたち。現在は、以上児 21 名、未満児 4 名の計 25 名で暮らしています。

ふたば（2 歳児）3 名は、自然の中で、ごちそう作りや丸太わり、岩登りなど、自分の好きなあそびを楽しみながら過ごしている毎日。ある日（9 月 16 日）急にかくれんぼごっこがはじまりました。「S（保育者）、モウイイヨ」と言ってしかけたのは K 男。その声に面白いことはじまったと言うように参加の I 子と A 子。そこへ「どこかな?!」と S 保育者もかかわって、あそびはどんどん楽しくなっていきます。

本当のかくれんぼとはちがって、近づいてくる保育者に「キャー」と言って共感して喜んだり、「ココダヨ」と自分の居場所を教えたり、「シーダカラネ」と言ったり、「コワイ、コワイ」と喜びあったり…。かくれんぼと言っても一人ひとりが違う楽しさを味わっていたり、「キャー」とか「コワイ、コワイ」と言うドキドキ感を共有してあそんでいることに比楽さん自身が気付いて面白がっている実践です。

比楽さんは、楽しんでいるから大丈夫とってしまうのではなく、何で楽しんでいるのか、何で盛り上がっているのか？と疑問に思うことで、子どもの心に気付くことができるし、記録を職員集団で話し合うことでより深く子どもの心に気付くことになるのでは、としめくくっています。

【盛岡】畠山 紗織「あそびを通して“友だちといっしょが楽しい”と思えるクラスへ」

北松園風の子保育園

2 歳そら組 12 名、担任 2 名（春から移動してきた保育者と 1 年目の保育者）。新しい担任への戸惑いや生活の節目に自己主張を見せる子どもたち。「大好きなあそびを通して大人との関係を築いていく」「友だちとあそぶことが楽しい」と思えるクラスになってほしいという願いを持ってクラスづくりが行われます。子どもの姿とごっこあそびのテーマ（車ごっこ・ままごと）からグループをつくり、あそびの中で自分の思いを出せるような工夫をします。この経験をきっかけに、運動会や「きつねのこんた」を題材としたごっこあそびなど、クラス全体へと関わりが広がっていく経過が見られていきます。あそびの楽しさと、保育者と子ども・子ども同士の安心できる関係性について考えられる実践です。

B 分散会（オンライン開催） *zoom「オンライン」のみ

大阪・熊本

【大阪】 坊 比香梨・尾崎 愛美 「子どもの姿から考える運動あそび」 瀬川保育園

年長ひまわり組 31 名（支援児 1 名）、担任 2 名（1 名は加配担当）。運動会で“体育的課題”に取り組むことが当たり前になっていた中で、竹馬では「運動会に向けてさせられているものになっていないか?」「あそびの要素も大切では?」と園内で議論。乗れた先の楽しいあそびを子どもたちと一緒に考えあい、「気持ちを膨らませ」「自信をもって取り組む」工夫を子どもたちの姿をみながら進めていき、運動会当日だけでなく、その後も竹馬でのあそびがどんどん広がっていきました。「運動あそび」の中での“課題”や“目標”とあそびの関係をどうとらえるのかを考えられる提案です。

【熊本】 大平 智花 「ぶつかりあって 感じ合っ て もっとなかまになる」 やまなみこども園

自然や生き物に囲まれた環境の中で 4 歳児たぬき組男子 14 名、女子 18 名計 32 名のクラス。主担任は 2 歳児からの持ち上がり。

相撲が大好きで、男女関係なく、子ども同士で勝負を楽しみ、絆を深め合いながら、隣接保育園ポランの広場くすのき組との相撲決戦を通して切磋琢磨する姿が描かれています。今回のお相撲対決に出場できる子どもは 5 人。誰の考えで何を基準にどのような時間を設けて 5 人の出場者を決めるのか。保育者も含め子ども達も頭を抱えながら決戦当日に向けて様々な想いが描かれた場面もあります。

決戦当日から結果にたどり着くまでも、子ども達や保育者の葛藤や心の動きに目を向けながら勝負を通して子ども一人一人が向き合い育ち合う姿と見守る保育者の思いが詰まった実践です。